

價值態度体系と人口問題

小 林 和 正

目 次

- はし が き
- 一、態 度
 - 二、特 性
 - 三、準拠標、統一主題
 - 四、リントンの價值態度体系
 - 五、センチメント
 - 六、價值態度体系の機能
 - 七、身分と役割
 - 八、役割期待
 - 九、價值態度体系と人口問題
 - 一〇、結 語

はし が き

人口圧力のもとに立されている人々の生活状態が実際にどのような様相を呈しているかを的確に把握することが、人口問題の研究にとつて基礎的な重要性を持つことは云うまでもない。生活状態の研究は従来所謂生活水準の研究として、専ら生活の外部的な経済的條件の分析に向つて進められて来た。国民経済構造との関連において人口現象を分析して行く以上、これは極めて当然にして必須な方法

であろう。しかしこのような経済学的分析だけでは人間そのものがどう云う状態を呈しているかを知ることは出来ない。人間の状態の研究は従来人口の質的研究の領域の方で行われて来た。しかしそこに於ては人間を生物学的次元に於てしか問題としなかつた。こうして、人々が実際にどうして生きているかと云うその実相は、人口の論議に於て絶えず問題とされこれについて何事かが述べられ乍らも、遂に科学的方法によつてこれを把握する試みは行われなかつた。

社会経済的次元と生物学的次元との間に大きなギャップとして取残されたこの局面は、文化と人間行動との次元であると云うことは出来ないであろうか。人々が何に苦しみ、何を望み、何に生甲斐を見出し、何に捌け口を求め、何に頼ろうとしているか。どういふ社会的規範に従つて生活しているか。総じてどう云う行動傾向を有するか。変化してゆく社会と文化とに對してどう云う適應能力を示しているか。そしてかかるすべての傾向が人々をして社会に對して何を強く要求するに至らしめるか。生活状態の研究に於て等閑視されて来たかかの一連の問題は、人間そのものに焦点をおきつつ生活全体を生動する姿を描えることを必要とするのであり、それは何よりも文化と人間行動との局面に關するものと云わねばならない。この新しく求めんとする目的物は、云わば生活の力動的構造(dynamic

structure)とも称すべきものなのである。かかる局面への打開は最早経済学的理論と生物学的理論とだけでは間に合わず、文化と人間行動との理論を必須なものとして要求するであろう。

本稿に於てはかかる狙いをもつた研究のための基礎として文化と人間行動とに関する社会人類学的基础理論の中、特に態度、価値体系或は価値態度体系と呼ばれるものについて考察し、最後にこれと人口問題との関係に触れたいと思う。

一、態度 (Attitudes)

態度という言葉は日常よく用いられ、それは個人の心的反応に対しても使われるし、或は又身体的動作を含めた意味にも使われるようである。しかしここでは心理学的概念としての態度を問題としたい。かかる概念としての態度は、特定の状況に対する人間の内面的反応傾向を意味する。従つて態度は状況に対しての実際の外面的行動の局面を含まないのであり、状況に対して取る心がま^えとして、それは実際の行動に於て端的な意味を有する反応である。従つて態度は根本的に予見的な行動 (anticipatory behavior) の形態をもつものであり、いわば行動を速記的な形の中にはめ込む (to telescope behavior into shorthand forms) 働きをするわけである。態度はこのような性質をもつものであるから、我々が人間の行動を理解し乃至は変容、統制するためには行動の全体的複合の中における態度の占るめ位置と機能とを理解することは極めて重要なこととなつて来る。

さて態度はこのようなものとして、どう云う諸特徴をもつか。

(1) 態度は対象を有する。初めにも述べたように、態度は必ず或る状況又は対象に対して生起するものである。勿論状況には極めて特殊なものから極めて一般的なものに亘つて、その特殊—一般性の度

合から見て種々のものがある。態度の関係する状況が比較的一般的なものに進むと、その態度は特性とか準拠標 (frames of reference) とか価値体系 (value systems) とか云う名で呼ばれるようになる。

(2) 態度は状況に対する外面的行動の端緒をなすばかりでなく、かかる行動に方向を与える。対象に対して例えば、愛する、憎む、好く、嫌う、接近する、後退する、支持する、破壊する、迎合する反抗する、協力する、闘争すると云う如きものである。

(3) 態度は方向と同時に強さ (strength) を有する。一般に態度は個人の実際の行動を観察したり、面接を行つたり、各種の心理学的テストを行つたりして推測する外に、被験者に定められた対象に対する彼自身の意見 (opinion) をきくことによつて、その態度を見出す方法がある。特に態度の強さを大量に統計的に測定するには、かかる意見測定の方法によるのが通例である。これは、強さによつて段階づけられた一列の意見を被験者に示し、その中のどれが最もよく自分の態度を表現しているかを指示するように命ずるのである。それによつて態度の強さを測定することが出来る。ただここで注意しなければならぬことは、態度は多くの場合、言語によつて表現されるものではあるが、態度と意見とは実際には必ずしも一致するとは限らないと云うことである。ヤング (Kimball Young) はこれについて次のように述べている。通常態度の統計的テストは言語的形式に於て行われるが、言語的表現が態度そのものに含まれる反応傾向に緊密に結合するものだという仮定に対して重大な疑問が投げつけられて来た。人の云うことと実際に行うこととの間の相関の度合に問題の焦点があるわけであるが、言行のよく一致している人もいるが、そうでない人もいる。一般に、安定した文化の中でパースナリティーのよく統合された人間は、分裂矛盾した集団と備

値体系をもつた社会に住む人間よりも言行はよりよく一致するであらう。価値体系の分裂した社会では、人がもし他人の非難をのがれようとするならば、二重の処置が要求されるであらうからである。

(4) 態度は表象及び觀念をその中に含んでおり、前項でも述べたように、それは大部分言語化される。しかし表象や觀念そのものと態度とを混同してはならない。

(5) 態度は感情と情緒とに結びついている。即ち対象或は状況に對して抱く不快、恐怖、憤怒、愛情及びすべての複合的な後天的に学習された情緒は態度の一部として機能する。

(6) 態度は目標(goal)を有する。態度は行動の基礎構造である以上、その行動に結びついた欲求とその目標とを有することは云うまでもない。当該状況そのものが目標である場合もあるが、無数にありうると考えられる状況の数に比べれば、個人の持ちうる目標の数は可成り少いものである。従つて状況の多くは個人にとつて直接の目標ではなく手段的意味を帯びるのである。

(7) 態度は価値判断を含む。態度は対象について何等かの基準によつて価値判断を下す。一人の人間について数多くの状況或は対象に關する彼の態度を調べるならば、その個人のもつ価値体系を知ることが出来るであらう。この価値体系が個々の状況に對する彼の態度を決定する主要な内面的因子となる。

(8) 態度は後天的に学習によつて形成される。南氏は態度の形成される過程を(i)幼年期の下意識的影響、(ii)幼少年期の学習と經驗、(iii)青年期の学習と經驗、(iv)成人における学習と經驗、(v)危機の經驗と云うように分けて分析を試みている。この学習による態度の形成過程の問題は、いわゆる文化によるパースナリティーの形成の問題の重要な部分を占めるものであり、それ自体極めて複雑な現象であるので、これについての論議は別の機会にゆずらねばな

らなす。

- (1) 南博、社會心理學 二八三頁。
- (2) Young, K., Personality and Problems of Adjustment, 1947, pp. 104
- (3) Idem, op. cit.
- (4) Idem, op. cit.
- (5) Idem, op. cit. pp. 106
- (6) Idem, op. cit. pp. 104
- (7) Cattell, R. B., Personality, 1950, pp. 85.
- (8) 南博、前掲書 二八五頁
- (9) Young, K., op. cit. pp. 105.
- (10) Idem, op. cit. pp. 104.
- (11) Idem, op. cit.
- (12) Cattell, op. cit. pp. 86.
- (13) 南博、前掲書 二八四頁
- (14) 南博、前掲書 二八八頁

※ 態度測定の詳細については Lundberg, G. A., Social Research, 1942, 福武直、安田三郎共譯「社會調査」参照。

一、特 性 (Traits)

ヤングは特性を次の如く説明している。特性とは個人の行動反応の永続的で且つ根本的な特徴ある型のことを云う。特性と態度とはよく混同されて使われるけれども、特性と云う時我々は、或る目立つた形容詞によつて記述することの出来る個人の行動や觀念の永続的な特徴を意味するのである。個人について我々は、きれいな好き、几帳面、根気強い、芸術的、攻撃的、柔順、保守的、急進的等々の形容詞を以て特色づけることが出来る。特性を表現するかかる名辭を我々は極めて豊富にもつてゐる。オルポート (G. W. Allport)

とオドバート (Odbert) とは一七、九五三語の特性名辭を集めた。さて特性と態度との異なる点は、前者が後者よりも高度に一般化されており、従つて前者は後者のように特殊の対象とのみ結びついたものではないと云う点にある。即ち対象からは比較的独立しているのである。特性はこの故に、或る人間を他の人々から區別する固有の特徵結合或は全体的スタイルであると云うことが出来る。

一般に態度調査の場合は、問題にされた状況に対して或る集團のメンバーがどのような態度をとるか云うことが問題となる。之に対して特性を問題にする時は、個々の人間の一般的な反応傾向が問題の焦点となる。特性は要するに、或る個人が多くの種々の状況に対してとる個々の態度から共通的な傾向を抽象することによつて得られるわけであり、従つて逆に個人の特性は個々の状況に対する態度の中に実際に表現されるということになる。

(1) Young, K., op. cit. pp. 105.

三、準拠標 (Frames of Reference) 統一主題 (Unifying themata)

これについてヤングの説く所をしばらく見てゆきたいと思う。

個人が成長するに伴い、彼の態度と特性とは社会及び文化に一層適応するのに役立つ如きより大きな価値体系 (value systems) 或は準拠標へと組織化されてゆく傾向を有する。身体的安全と経済的安全、愛と性生活、交友、新奇な経験への欲求、その他諸種の動機—このようなものに關係をもつた個人の主要な動機や欲求に主として集中した基礎的な準拠標が多様に存在することは確かである。個人はつまりその生活全体を特徴づけるに至る或るライトモチーフ (leit motifs) を發展させるのである。或る与えられた状況に対処する個人の思考や行動は夫々独特であり、特殊のものであつても、このように

一々の状況によつて思考や行動が一見異なる背後に、広範囲の個々の行動に対して総合的な或は整合的 (co-ordinating) な焦点として働くところの或る基本的な型どり (basic patterning) が存在することは我々のしばしば気が付くところである。マラー (Murray) はこの基本的な型どりのことを統一主題 (unity theme) とよんでゐる。マラーは彼の協力者と共に、一群の正常な人間によつて、一方に彼等の基本的な欲求と価値と、他方に彼等のあらゆる行動 (overt conduct) とに關係した彼等の動機づけ (motivations)、空想、理想及び野心、つまり一言で云えば内面的生活 (inner life) の特徴をつかみ出すための多くのテスト、面接、質問紙法及びその他の諸方法によつて試みた周密な記述と分析とに於てこの事実を詳しく説明した。^{*}この調査は—精神分析学者が屢々示したように—たまたまの観察者の眼には往々かくされていて分らないことがあるけれども、正しいテクニックを用いれば開示されるところの或る循環的な深層に横る関心 (recurrent deep-lying interests) 及び思考と行動との様式 (modes of thought and action) を個人がもつてゐることを示した。例えば職業の選択は息子に対する激しい競争から往々にして生ずる。又異性ととの正常の交渉の忌避は無意識的ではあるが母親に対する強い永続的な愛着と關係があることがある。或は兄弟の誰かに対する長い間抑圧されて来た敵意は世界的な同胞愛を含む人道主義的同情の欲求と關係をもつた豊かな空想的生活にそのはげ口を見出すこともある。或は又、人の主要な生活上の関心が、強い劣等感や羞恥感に起源をもつ高い社会的身分に対する働くことを知らぬ渴望をめぐつて回転することは我々の周囲にも時々あることである。このようにどの基礎的な準拠標の構造にも或は生活の統一主題 (unifying theme of life) の構造にも、觀念、理想、習慣、特性及び態度からなる種々の結合物が入つて来るであらう。こ

それらの中のいくつかは疑いもなく個人が共通に彼等の社会と文化とにさらされることの中にその根基をもち、他のものは個人の特殊の経験の再組織 (reorganization) を示すものである。⁽¹⁾

以上が大体ヤングの説く準拠標或は統一主題の概念であるが、ここに注意しておかねばならないことは、特性と準拠標 (統一主題、価値体系) との相異である。両者共に、態度よりは一段高次の一般化された内面的反応傾向をさすのであるが、特性は前にも述べたように、対象からは比較的独立にその個人の傾向の特徴を一言にしてつかむことの出来るような形容の仕方によつて表わされ、従つて個人タイプの意味するのに対して、準拠標又は価値体系は、その有する体系的內容が注目されるのであり、それは特に文化の歴史的構造との関連に於て考えられねばならぬものである。

(*) H. A. Murray et al., 1938, Explorations in Personality: A Clinical and Experimental Study of fifty men of College Age. 251p.

(1) Young, K., op. cit. pp. 106-107.

四、リントンの価値態度体系 (Value-attitude Systems)

リントン (R. Linton) は個人の自動的行動反応を反応の特定性の度合から考察している。即ち自動的反応には極めて特殊の状況としか結びつかない反応から、非常に多くの状況に対する反応のどれにも含まれるような反応、従つて個人の行動の広汎な分野にわたつて認められるような高度に一般的な反応に至るまで、その特殊性の度合をみとめることが出来る。ここで問題とするのは主として一般的反応の方であるが、これはそれを惹き起す刺激要素を含んでいる状況ならば、どんな状況に於ても、それに対する反応の一部として

繰返されるものである。⁽²⁾ 特定の反応はそれと結びつく特定の状況が課する諸条件を實際にみたすものであるから、多くの外面的行動を含むわけであるが、これに対して一般的反応は、主として内面的反応として個々の特定の反応の中でその部分機能を果すのである。外面的行動を含んだ自動的反応は習慣 (habits) と呼ばれるが、これに対して自動的な内面的反応は態度の問題となる。

リントンは、一連の状況に共通して存在し、個人の内面的反応をよび起しうるすべての要素を価値とよび、そのような要素によつてよび起される内面的反応を態度と定義し、かかる価値と態度とが相倚つて形作る一つの刺激反応の綜合体に対して価値態度体系という名称を与えている。⁽³⁾ この体系は、多分に情緒的なものであると同時に予測性を含み、この体系がひとたび個人の中に確立されると、自動的に又大部分は意識下にあつて作用する。そして個人のもつこのような体系の中の一つがいくつかの異つた外面的行動型の共通の基盤となり、それらのすべてに動機を与える。

リントンの云う価値態度体系はこのように比較的一般的な反応であるが、その中にも仔細に見れば特殊なものから高度に一般的なものに至る諸段階があるであろう。従つて先に分類した態度、特性及び準拠標の三つはリントンのこの価値態度体系の中に一括して納めることも出来るかと思ふ。リントンは次のように云つている。価値態度体系には極めて特定のなものもあるが、又高度に一般化されたものもある。即ち極めて多数の状況によつて喚び起され、その結果個人の行動の大半に影響を及ぼすような態度がある。そして我々が個人の特徴的な性格として彼は樂天的であるとか悲観的であるとか、物事を信じ易いとか疑い深いとか、或は内面的だとか外向的だとか呼ぶときは、このように高度に一般化された態度を基準にしていつているのである。このような場合には、新しい状況に遭遇し

ても、その状況の特質に関係なく単にそれを登録するだけで、その特徴的な性格をもつた情緒的反応と予測とが惹き起される。このような一般的な態度は、比較的特定な価値態度体系の根底にあつてその發展に影響を与える。この場合リントンは価値態度体系の中の特に特性的なものについて云つてゐるわけである。従つてリントンの価値態度体系は態度も、特性も、準拠標もすべて含めたものを指してゐると考えてよいであらう。

(1) Linton, R., *The Cultural Background of Personality*, 1945.

清水幾太郎、犬養廉彦訳、「文化人類学入門」一三四頁。

(2) リントン、前掲書 一三五頁

(3) (4) (5) 同 右 一三九頁

(6) 同 右 一四一頁

五、センチメント (Sentiments)

態度よりも一層深い所にあり、従つて云わば大きな複合化された態度をあらわすものとしてセンチメントと云う用語が用いられることがある。このセンチメントは前にのべた価値態度体系と略々同じものを意味するものようである。ただセンチメントと云う時は価値体系の内容よりはむしろ、その価値体系を支持することにおける感情的な或は動機づけ的な局面が幾分強く表現されるものようである。我々の社会生活が順調に行われてゆくための社会的規範を持つ共通価値 (common values) に人々が従うことは、動機づけの観点から考察するならば、人々がかかる価値体系を支持することに於て共通のセンチメント (common sentiments) をもつことを意味してゐる。とパーソンズ (T. Parsons) は述べてゐる。パーソンズは更に云う。このセンチメントなる言葉は対象に対する対処における纏綿的 (cathetic) 及び評価的様式の文化的に組織化された

ものを示すのに用いられるのである。そしてかかる共通価値を支えるこのセンチメントは一般に後天的に學習され獲得されたものでありパーソンズナリティー構造の一部として内面化され (internalize) てパーソンズナリティーの眞正の欲求傾向 (genuine need-dispositions) となる。センチメントに於て人間行動の動機づけ的統合 (motivational integration) が行われ、センチメントはこの動機づけの深層 (deeper layers of motivation) を形成する。

(1) Cattell, op. cit., pp. 157

(2) Cattell, op. cit., pp. 161

(3) Parsons, T., *The Social System*, 1952, pp. 42

(4) (5) Parsons, op. cit., pp. 41

(6) (7) Parsons, op. cit., pp. 42

六、価値態度体系の機能

さて以上に於て態度、特性、準拠標、価値態度体系及びセンチメントの概念を検討して来たのであるが、これらはパーソンズナリティー構造の中に内面化された個人の内面的行動反応の傾向を意味するものであつた。個人が如何に行動するかはかかる内面的基準体系がその決定に与る。しかしこれは個人的行動の場合についての考察であり、人間の現実の行動たる社会的相互作用の中で、この内面的体系が如何に働くかについては更に考察を進めねばならない。

価値態度体系は前にのべたように、感情や情緒と強く結びついており、個人にその価値体系に従つて行動すべく自動的に欲求や意志を与える。個人がその価値体系に従つて行動した場合には、彼は或る快感、喜悅、安心、自信を感じるであらう。これに反し、何等かの原因で、彼が自らの価値体系に一致しない行動をした場合には、恐怖、怒り、或いは少くとも不満の反応をひき起す。即ち、か

かる違反行動を犯した前後にはかなりの情緒的な混乱を彼は感ずるであろう。しかしこのことは単に自分自身の行動に対してばかりではない。他人の行動に対してもかかる情緒的反応をひき起す。これは個人の価値態度体系の投射的側面たる役割期待なるものの作用によるものである。価値態度体系の社会的機能はこの役割期待に於てその重要性をもつ。しかしこの役割期待について論ずる前に先づ身分と役割とについて触れなければならぬ。

(1) リントン前掲書 一三九頁。

(2) リントン前掲書 一四〇頁。

七、身分 (Status) と役割 (Role)

個人が実際に社会に参与するのはその身分を通してであると云われる。身分とはリントンによれば、社会のもつ諸種の組織体系の中で個人が或る期間占める位置を意味する。この或る期間と云うのは一生涯に亘ることもある。例えば性別における身分、即ち男子又は女子と云う身分。或はすべての人は必ずその親に対して子であるという身分を終生もつ。之に対して年令的身分は年と共に絶えず変化してゆく。その他の殆ど大ていの身分も個人がそれを占める期間には限度がある。今個人のもつ身分をあげて見ると例えば、性、年令、家族関係における位置(父、母、夫、妻、兄弟姉妹、祖父、祖母、孫等)、親族関係における位置(伯叔父母、甥姪、従兄弟等)、職業集団における地位、社会階級の地位、学校の卒業同期等が考えられよう。これを個人について具体的に例示してみると、例えばある個人は男性であり、壯年であり、家族関係においては長男であり、二児の父親であり、妻に対して夫であり、又親族関係では三人の甥姪に対する伯父であり、七人の者に対していとこである。又世帯に於ては世帯主である。更に、製鉄会社の課長であり、A大学の出身

者であり、その大学の第一回の卒業生である。又東京都の住民であり、彼の子供の学校のPTAの役員であり、絵画クラブの会員であると云つた工合になる。個人は社会関係が複雑になればなる程、このような身分を益々沢山合せ持つことになる。しかし実際の社会的活動に於てこれらの身分のすべてが同時に参与するわけではない。即ち例えば、会社で自分の所定の職務を執っている時は課長であり、労組との交渉に於ては会社側のメンバーであり、往來を歩く時は他の人々と共に單なる交通者の一人であり、しかしその時、たまにたま出会つた甥に挨拶された時は隣間伯父となつて答禮する。又電車を待つ行列に加つている時は前から何番目かの人間でしかなく、車内で老婆に席をゆすつたとするならば、その時は強壯なる男子としてであり、更に、家に帰つて妻の出迎えに対応する時は夫であり、子供の相手をしている間は父親である。又PTAの会合に出席中は役員であり、店で買物をする時は客であり、医者の診察を受けに行つた時は患者となる。又国会議員の選挙の投票をしに行つた時は国民の有権者の一人であり且つ、A政党の支持者である。このように実際の社会活動に於ては、その状況に応じて通常極めて少数の身分が参与するだけである。個人が現実にそれに基づいて行動している身分は、その時に於ては顯在的身分 (active status) であり、その間彼の持つ他の身分はすべて潜在的身分 (latent status) になつてゐる、とリントンは云つてゐる。尤もこれは外面的参与について云えることであつて、実際に個人の心の中では、例えば、課長の仕事をし乍ら夫としての問題を考えるかも知れず、家庭で子供の相手をして乍ら課長としての責任について頭を悩すかも知れないように内面的にはかかる顯在—潜在的區別はつけにくいものである。さてかかる身分には、一般に社会的に定つた役割が結びついている。役割とは、或る身分に結びついた文化型の総和を意味し、それ

はその身分を占める人に対して社会が課する態度、価値、行動のすべてを含むものであるとリントンは定義している。前の例は、個人が同時に多数の身分を合せ持つ場合についてであつたが、逆に一つの身分は、多数の人々によつて同時に占められることが出来る。例えば成年男子とか、父親とか、夫とか、工場労働者とか、都市の住民とか、国會議員選挙有権者とか、国民とか云うような身分は一社会の中の多数の人々によつて持たれるものであり、従つてかかる身分に結びついた役割も多数の人々によつて同時に認識され実行されるのである。このようにして個人は或る身分に於てその役割を演ずることにより社会と文化とに行動的に関与することが出来るわけである。

さて役割は社会が課するものであり、個人はそれを認識し実行すると云つたが、かかる役割を個人が演ずる場合、劇の役割を練習中の人間のように、一々意識的な努力を以てそれを行うわけではない。もしそうであつたならば、我々の社会生活は極めて困難な、神経を消耗させるものとなるであらう。役割は個人の成長期間を通じて学習により徐々にそのパースナリティーの中に内面化され、自動的反応の型として形成される。このようにして役割は通常大して意識を用いることなしに自動的反応として演ずることが出来るのである。

役割は前に述べたように身分に関して社会が課する文化型であると云えるが、ここではこの文化型の中、特に価値体系を頭に描いて来た。さてこの社会が課する文化型という時それは個人にとつて外在的な意味を帯びている。しかし今まで外在的な価値体系については考へて来なかつた。既に見て来たように価値態度体系は個人のパースナリティーに内面化されたものである。しかしかかる価値体系の源泉は個人にとつてはむしろ外部にあるのであり、学習によつて

個人はそれを内面へ同化する。本稿の論議は個人から出発したが、価値体系の学習過程に重きを置くならば、むしろ社会から議論をはじめべきであらう。社会のもつ価値体系が一般に個人に先行するからである。即ち個人はその中に生れ落ちて来るか、移入して来るかとする社会のもつ文化の価値体系によつて、彼の価値態度体系の基礎は形成されるのである。文化とパースナリティーとは或る意味で isomorphic である。個人のパースナリティーとしての価値体系と同時に社会のもつ文化としての価値体系が考えられる。価値体系は社会的に見る時、その社会の大部分の或は一部のメンバーによつて分有され且つ伝達されてゆくものであり、個々のメンバーがもつている共通の価値態度体系を、それがいわば着床しているパースナリティーから引離して抽象し、社会がかかる価値体系をもつていると考える時、それは文化としての価値体系となる。しかしこれは単なる思考的産物ではなく、文化としての価値体系は現実個人にとつて外在的なものとしてその個人に向つて作用を及ぼす。それが社会の課する文化型としての役割であつた。文化は具体的には身分と役割を介して個人に関係をもち、その逆も亦真である。しかし役割は個人にとつて全く外在的なものではない。先にも述べたように、それは外在的であると同時に内在的でもある。

(1) リントンの前掲書 九九頁

(2) リントンの前掲書 一〇二頁

(3) (4) (5) リントンの前掲書 一〇〇頁

(6) Cattell, op. cit. pp. 394.

八、役割期待 (Role-expectation)

役割が個人に課されるのは具体的には役割期待という形において行われる。この役割期待には、他の人々が自分に対して抱くであら

うと思う役割期待、即ち彼の身分の役割期待と、彼が他人に対して抱く役割期待との二つがある。一般に役割というとき、それは社会的相互関係に於て、人々が夫々の身分に於てその役割を果すことによつて行為をやりとりし、以て相互関係する双方の人間が目的を果し合うと云うことを予想的に含蓄している。従つて例えば、売手と買手、上役と下役、教師と生徒、親と子、夫と妻というように、緊密な結合関係をもつ身分の組合せに於て、かかる関与者のどちらかが相手の抱く役割期待に反した行動をした場合は、忽ち現実的利害関係に波紋を生じて、相手の情緒的混乱は強く起るであろう。社会的相互作用がうまくゆくためには、双方について云えることであるが、相手が自分に対して役割期待を抱くと同時に、自分が相手からどういふ役割期待を抱かれているかを意識するのでなければならぬ。而もその上両者の期待がびつたり一致するのでなければならぬ。

又緊密な利害関係の全くないような立場にいる他人に対しては、その他人に対して抱いた役割期待に反してその他人が行動した場合にはやはり情緒的反應を喚び起すものである。自分には全く関係はないのだが、はたで見えいられなくて余計なおせっかひをしたるするのは、かかる反應のなす仕業であろう。

一般に役割は社会的規範の意味をもつており、社会的秩序を維持するよう仕組まれていると考えられるが、個人のもつ価値態度体系から生ずるかかる役割期待の反應は、社会的規範の維持の実際的な保障として働くであろう。

しかし役割期待は現実の社会に於ては必ずしも一致しない。親の期待どおりには子は行動せず、子の期待どおりには親は動いてくれない。経営者と労働者との夫々の相手方に対する期待が相互に衝突する。国民の手で選んだ政治家が国民の期待どおりには活動してくれない。人々の期待は外され、要求は阻止され、希望は裏切られる。

このような役割期待の衝突は純粹に個人的な違反によつて生ずる場合と、社会的制度の不調和から生ずる場合とある。社会的に最も問題になるのは後者であることは云うまでもない。制度間の不調和、換言すれば、制度間の価値体系の矛盾衝突は変化しつつある不安定な社会においては常に存在する。そしてそれは歴史的に見れば主として新しく形成されつつある制度と、旧き制度との間の問題である。我々の社会に見られる階級間、世代間、男女間或は家庭と職場との間の価値体系の衝突はその端的な例証である。かかる社会と文化との構造的な不調和に起因する価値体系の矛盾、役割期待の衝突は、それ自体の構造的複雑さと、それが人間の感情や情緒に強く結びついたものであるために、その合理的な解決は必ずしも容易ではなく、往々にして、陰謀、偏見、無政府状態、逃避等の集団的反應の原因となる。特に個人が相衝突する価値体系をもつた役割を同時に演ぜねばならない時は、彼の価値体系の統一は危機に瀕し、いわゆるパースナリティーの分裂に導かれる。忠ならんと欲すれば孝ならず。あくまでかかる矛盾を追求してゆくだけの力のない者は、かかる窮地に於て表裏相反し、言行相一致せざる行動に走らざるを得ない。そこに於ては一貫した価値体系によつて自己の眞実を表現する通路が塞がれるばかりでなく、人々は眞実の自己そのものをも見失うに至る。パースナリティーの立場から問題となるのは、単なる集団間の価値体系の衝突ではなく、このようにパースナリティーの内部にまで喰い込んで来る社会的な不調和なのである。

九、価値態度体系と人口問題

以上に於て価値態度体系の概念及びその機能について述べて来たが、最後に人口問題に於て価値態度体系がどういふ意味をもつかについて考察しなければならぬ。価値態度体系は人間の社会行動を決

定する重要な因子であり、従つて全体としての社会の動行に対して経済的要素と共に根源的な関係をもつと考えられるのであるが、しかしここでは国民経済構造の人口問題に対する如き互視的な関係に於てではなく、人々が人口圧力に対して如何なる適応の仕方をしていくかをその日常生活の実態の中に見出そうと云う人口問題との微視的な関係に於て考えてみたいと思う。

本稿の冒頭で述べた如く、人口圧力に対する人々の適応の状態を生活の力動的構造を把握することによつて明かならしめようとするのが筆者の狙いであり、かかる生活の力動的構造において価値態度体系が重要な位置を占めると考へるのである。生活の力動的構造の主なる要素としては次の如きものが考へられよう。

- (1) 生活の経済的物質的條件
- (2) 成員の構成とその身体的状態
- (3) 関与する文化型と価値態度体系
- (4) 生活における目的、理想、希望、野心、生甲斐、生への意欲
- (5) 生活における前進と退行
- (6) 抵抗

(1)と(2)とは論ずるまでもない。(3)はどう云う文化型をもつた制度或は亞制度によつて生活が滲透されているか、それと内面的な価値態度体系との一致及び不一致、文化型の不統合と価値態度体系の分裂等の問題に關するものであり、生活の力動的構造の基礎的部分である。価値態度体系は靜的構造をもつたものではなく、前に述べたように、欲求、生活目標、理想、野心及びそれらに対する情熱と結びついた極めて力動的な構造をもつたものである。(4)人間が生甲斐を感じて奮起したり、失意の底に沈んだりするのは深くこの価値態度体系に淵源するものと云えよう。人々が生存の危機に際して如何なる行動に出るか、その危機を克服するために如何なる意欲を示す

かは、現下の我が国の人口問題に於て看過すべからざる問題であり、そのためには各種の階層における国民の価値態度体系に關する研究は必須である。

価値体系には種々の局面があるわけであり、例えば政治的、経済的、社会地位的、人間關係的、道徳的、教育的、認識的、美的、宗教的、身体管理的な局面などが考へられよう。人口の社会移動のメカニズムの解明にとつて重要なのは、企業、營利、職業、社会的地位、出世、競争等経済的、社会地位的局面に關する価値体系である。そしてこれらは特に人々の自己の生活及び社会的価値に対する価値態度に焦点が置かれねばならぬ。これが個人の社会移動の内面的決定動因となる。

(5) 人間が狀況に対して前進的な順応 (adjustment) を試みるか、退行的な適応 (adaptation) の道をとるかは何価値態度体系の行動的なあらわれの極めて重要な二大方向であり、生活の力動的構造に於てこれを無視することは出来ぬ。退行 (regression) とは元來精神病理学で用いられる概念であり、詳細は精神病理学にゆずらねばならぬが、それは要するに、独立した人間として生活環境に順応してゆくことに困難を感じるために、現実から退いて安易な狀況に逃避することであるが、それは人が曾て快適な適応を行へた昔の態度の再現となつて現われるといふのである。

この退行の実際的なあらわれについては一々述べることは出来ないが、日常的事例についてアレキサンダー (F. Alexander) が述べている所を見てみよう。定職について眞面目な「よく適応している人」は氣樂な遊びを定期的に行はしがるものである。日頃の苦勞が多ければそれだけに子供っぽい氣晴しへの退行的要求を必ず感ずるのである。実業家は仕事に熱心しながら、丁度子供が「ガラガラ」や「おしやぶり」の類に手をのばすように本能的に葉巻をつかもうと、

するだろう。チェーイングムも幼時のおもな快感でもあれば緊張からの救でもあつた口唇の律動運動によつて、精神の集中から退行的に解放されようとする他の実例である。アルコール類の飲用も一つのありふれた形の退行的傾向である。トランプやスポーツから發する快感も強力な退行的要素をもつている。特に人は責任ある成人として自ら生活を切り開いてゆかなければならない時、その順応が困難であると、往々にして早期の行動類型に逆戻りする。このように人間の成長過程における早期の行動類型や価値態度体系は完全に消滅することはなく、成人になつてからの退行の際に現われる。従つて価値態度体系はたとえよく統合されていても、成長過程に結びついた重層的構造をもつと云えるのであろう。このように価値態度体系は極めて複雑なものである。

さて退行は先に見たように日常生活の活動的循環—緊張と解放—に於て、前進的な活動をする者にとつても必要欠くべからざる要素である。しかし人口問題に於て意義のあるのはかかる退行ではなくて、生活の全体を掩う退行である。それは自己の権利の拋棄、権威への屈従、寄生的生活、惰性的生活、享樂への耽溺等生活の全体が退行的方向に向う現象である。人口圧力の生活の力動的構造に及ぼす重大な影響としてかかる退行現象は極めて重要な警告的意味を有するであらう。

さて退行の反対は前進である。前進的生活なくしては人口問題の解決は不可能である。自覚、知性の活動、技術の向上、新しい環境に順応するための絶えざる積極的な学習、建設的企図を有する競争等凡そ人間の自由と独立とへ指向する力動は前進である。この前進的力動が、如何なる條件の下に如何なる集団的構成を以て、如何なる形態と強さとに於て生ずるか、そのメカニズムの解明は人口政策に対して積極的な意義をもち得るであらう。

(6) 抵抗は価値態度体系、特に自己又は人間一般の生命と生活とに対する価値態度と直接的に結びついたものであることは云うまでもない。この抵抗の意義なくしてはそもそも人口問題の意識はあり得ない。個人がどの線に於て抵抗するかはその個人の価値態度体系を知る重要な手がかりの一つである。個人の抵抗線の中、肉体に対する価値態度如何は、日本の如き文化型の下における生活に於ては特に重要な関わりをもつてあろう。経済的価値が与えられぬ過剰肉體労働を余儀なくされている生活の中で人々がどのような抵抗意識をもつかは肉体に対する価値態度を明かにするであらう。肉体的に苛酷な生活は往々にして非合理的な精神主義的価値体系によつて人々の合理的な抵抗意識を弱めようとする。肉體労働、健康、生命に対する価値態度は人間生存における最後の抵抗線と結びつくものとして、人口問題に於て他の価値体系と共に重要な意義をもつと考へねばならない。

以上が生活の力動的構造に関する構想であるが、それは要するに社会経済的及び生物学的條件との関係を検討しつつ、文化構造（これは歴史的立場から眺められねばならぬ）とのつながりに於て把握された人間心理の力動的メカニズムに立脚して生活の生ける構造をとらえようとするものである。

(1) Alexander, F., Our Age of Unreason, 1942.

井村・懸田・佐々木共譯「理性なき現代」一六四頁

(2) アレキサンダー、前掲書 二〇一—二〇三頁

(3) アレキサンダー、同右 二二七頁

一〇、結 語

人口問題の研究が国民生活の実態を知ること何よりも必要な手がかりとしており乍ら、生活している人間の生ける姿そのものに焦

点を向けることを怠つて来たことは確かに大きな矛盾であつた。そのためにかかる人間の生の現実、外部の経済的條件と生物学的性質及び状態との細密なる分析表の間から幸うじて臆げなる姿を以て研究者の脳裡に描き出されるに過ぎなかつた。かかる単なる想像裡の姿が人口の理論構造の中に理論的に組入れられるすべはなかつた。こうしてそれは単なる傍証的存在として、ただ断片的に垣間見られ、あとは想像裡に補われさえすればよいような価値しか与えられず、人口現象の分析対象からは除外されて来たのである。かかる傾向は畢竟人口の適応を中心問題とする人口問題の研究が今まで、人々の現実の生活の中に於ける適応現象を人間それ自身に焦点を向けて探究することから出発しようとする精神を著しく欠いて来

たことを意味するのである。かかる傾向への反省が本稿の動機を与えたのである。生活の力動的構造は生活の中における人間の適応状態を捉えるために構想された生活構造であつた。そしてこの生活の力動的構造に接近するために、本稿で試みたのが価値態度体系に関する考察だつたのである。生活の力動的構造の概念は実証を伴わないうために未だ極めて曖昧であり、従つてその人口問題研究への寄与の可能性も全く未知数であると云わざるを得ないが、ただかかる局面への人口問題の研究に対して、その視線を生物学的次元から人間行動の次元へと高め、その視野を経済構造から文化構造へと拡大することを要求することは確かである。

工場労働者の職業態度

京浜地帯のT電気T工場は約三千五百の従業員を擁する近代的大工場であるが、その中一部の工員について行つた態度は調査(昭和二八・六)の結果によると、現在の職業をつとめられる限り出来るだけ長くつづきたいという希望をもつ者が五三・六%居り、一生やりぬきたいという者が三二・一%いるが、現在の職業に対して興味がもてると云う者が、前者に於ては六八・〇%であり、後者に於ては八八・九%となつてゐる。調査者は「一生やりぬきたい」という程度の方を「つとめられる限り出来るだけ長くつづきたい」という程度よりも、現職に対する執着度を高く見積つていたわけであるが、このことが現職に対する興味の度合の比較から裏

付けられていることが分つた。このように理論的に組立ててつくつた態度尺度は、一応その序列の適否を何等か他の適当な項目と組合せてみることによつてためしてみることが必要である。上記の例においては幸い予想が當つていたけれども、そうでない例は往々にしてあるから氣をつけねばならない。

次に職場条件に対する不満をみると、「収入の点で勤め先をかえたい」者二二・一%、「上役に自由なものが云えない」者二一・四%、「上役が十分みとめてくれない」者一九・三%、「不公平な待遇をうけている」と云う者一八・六%、「同僚間のふんい気が氣にくわぬ」者一八・六%、「仕事に興味をもてない」者九・一%、「仕事をうまくやつてゆけそうもない」者

七・一%となつていて、経済的不満が最も多く、次には人間関係的不満が多いことは興味深い。

次に「仕事に対する心がまえ」を自由記入させた結果をみると、技術的に表現した者、個人的心情的に表現した者、社会的に表現した者の三つに分れるが、技術的心がまえには、安全、確實、敏速という如きものが圧倒的に多く、個人心情的心がまえには、誠心誠意、努力、忍耐、研究心、最善をつくすというようなのが典型的であり、「社会的心がまえ」としては、責任感、人のいやがることをやる、人に負けぬようにやる、同僚とまさつて起さぬようにやる、信用、目上の人を敬い目下の人を指導する、自分のため会社のため国のため等々。(小林記)